〈選外佳作〉要旨

開発と自然保護の融合へ

高橋　俊男

狩猟に生活を依存していたアイヌの人々は、自然崇拝の信仰を持ち、自然と調和・共存する生活体系をつくりあげていたが、明治時代から始まった和人の開拓は自然を征服するものと考えていたうえ、経済優先・科学万能主義によって自然は急速に破壊された。

「豊かな自然」のある北海道だが、自然破壊は進んでいる。自然林の減少は平野部から山間部にまで及び、改修工事等によって河川も自然のままに残されているものは少くなった。これらの影響を強く受けているのは動物たちである。

原始的自然の保護を否定するものは誰もいないし、それに重点を置く傾向が強いが、身のまわりで進んでいる自然破壊に対してはあまり反対しないのではないか。都市より地方に行くにしたがい、開発を望む声は強く、自然破壊に対する関心もうすれるが、破壊された自然はもとにはもどれない。どのような規模の開発でも自然への影響を考慮し、監視も行わなければならない。

自然保護という言葉ほど人間の思いあがりを表しているものはない。人間には自然を管理する力はなく、自然に保護されて生存しているのであり、「自然保護」は「自然に保護して貰う」という方が的確であろう。

今まで自然保護は開発との二者択一論で扱われ、産業重視・経済性優先の結果、自然破壊が進み、更にはその産業を破滅に追いこむ例が多かった。北海道のように農林水産業が大きなウェイトを占める地域では産業の安定のためにも自然保護が不可欠である。このままでいけば次の世代にこの自然を伝えられないであろう。自然を残し再生させる事業を自ら進んで行うことこそ、真の自然保護のあり方であると思う。これは開発事業以上に公共事業になる可能性があると思うし、北海道の自立につながると思う。

天然記念物のシマフクロウは絶滅の危機に立たされている。これを保護することは他の動物の保護にもつながる。シマフクロウを北海道の自然保護のシンボルとしてアピールし、それを通じて自然を守り再生する運動にとりくみたい。

自然保護は開発反対運動だけではなく、草の根的な啓蒙活動も重視していかなければならない。二者択一論ではなく、開発と自然保護の融合であると思う。自然と接するマナーを覚え、自然とつきあっていく方法を確立しなければ自然との調和・共存はありえない。これは人間の知恵や技術をもってすれば不可能なことでなく、今こそアイヌの人々の自然観を見習うべきである。自然界のあらゆるものに配慮できる心のゆとり、これが本当の潤いある生活の証に思われてならない。